

松田 愛 | 富山大学芸術文化学部講師

〈当時の「clas」の雰囲気、学生スタッフの心意気などはいかがだったでしょうか〉

●長尾先生の展覧会とともに始まった「clas」は、図書館の本（知）がテーマとなっており、「視覚を通した複眼的な思考と総合的な知識」を育む新しい場所が、大学に誕生したという感じでした。当初、スタッフは大学院生3名でした。お互い初めて一緒に仕事をする事になり、展覧会の運営準備や広報、ギャラリーの維持管理など、様々な仕事と一緒に取り組みました。初めてのことが多くとても大変でしたが、「clas」設立に携わられ、スタッフをする上で色々のご指導いただいた茂登山先生、ともに仕事をしたスタッフの2人、展示をしてくださった作家の皆さんや、運営を支えてくださった多くの皆さんとともに、かけがえない時間を過ごさせていただきました。

〈ご自身は、どのような経緯でスタッフに応募されましたか〉

●情報科学研究科にいらっしゃいました茂登山先生にお会いできたことがきっかけです。現代美術の研究についてご相談しようと、先生の研究室を訪問した際に、ギャラリー・スタッフのお話をお聞きしました。最初は、自分にできるのかどうか不安でしたが、思い切って飛び込んでみようと思いました。それが始まりでした。

〈担当した企画、あるいは印象的な展示などのエピソードはございますか〉

●初めて企画に携わった展覧会「something as if we do」（2007年）をはじめ、作家の皆さんと一緒に仕事をする中で、なぜ美術史やアートを学ぶのかについて、考えさせられました。また、「ノーヴァヤ・リューストラ」展（2007年）のトークイベントでは、12月の星空の下、友人が温かいグリューバインを作ってくれました。トークの後に皆でいただきました。

〈大学内での「clas」の存在、今後のあり方や期待についてどのようにお考えでしょうか〉

●10年前、「clas」ができた年の座談の中で、当時教養教育院長をされていた若尾先生は、これからの「clas」について、「長い長い眼で、それはものすごくボディブローみたいに効

いてくると思います，教養教育の中で」と期待を込めて語られました(『「clas」アニュアル07/08』より)。「clas」は、「cell for liberal arts & science」の名の通り，教養教育のための空間です。ここには，作品と対話し，アートを通じて様々な思考を巡らせる，そんな素敵な時間が流れています。また，展覧会やイベントを通じて，学生や教職員，地域の人々，他大学や遠くから展覧会を見に来て下さる方々など，普段出会うことのない様々な人々の交流が生まれる場所となっています。この10年間，多くの人々の想いや愛情に支えられて持続してきた空間だと思います。これから先も，「clas」が私たち皆の成長とともにあることを願います。



『Between Past and Future 「clas」10周年記念アーカイブ展』より

「clas」スタッフOB/OGへのインタビュー